

見えないものに目を注ぐ 1コリント4-16-18

何年か前、私は病院で心臓の写真を撮ってもらったことがあります。お医者さんがフィルムを見ながらいろいろ説明してくれました。しかし、心臓は見えても、私の魂は見えませんでした。当前のことです。

恋人は見えても、二人の間の愛は見えません。人間は見えても、人格は見えません。そんなことは当たりまえです。

しかし、そんなことは良く分かっている筈の私たちも、ある錯覚に陥ることがよくあります。それは、見えるものがすべてだという錯覚です。

パウロは次のように言っています。「私たちは見えないものに目を注ぐ。見えるものは過ぎ去ってしまうが、見えないものは永遠に続くからである。」

パウロが言うように、見えるものだけを見ていたのでは、本当に生きることはできません。見えない、永遠に続くものを見極めてこそ、人間らしく生きることができるのです。これがキリスト教信仰の大前提です。

それでは、見えない永遠に続くものとは何でしょうか。パウロによれば、それは神の恩寵、つまり、神の恵みです。

この神の恵みは、信仰の眼(まなこ)、つまりイエスの目で見ない限り、見えないのです。信仰の眼(まなこ)で見る時のみ、つまり、イエスのかけている眼鏡と同じ眼鏡をかけた時に、私たちは良い時も悪い時も、喜びの時も悲しみの時も、私たちを導き給う神の御手をしっかりと見極めることができるのです。

主イエスはこの点を他の所で次のような言葉で教えておられます。「空の鳥を見てごらん。野の百合を見てごらん。彼らは美しく、無邪気だ。」

空を飛ぶ鳥や野に咲く百合の花の美しさ、無邪気さは肉眼でも分かります。しかし、イエスの目で同じ鳥と百合を見る時、肉眼では見えなかったものが見えてくるのです。つまり肉眼で見る鳥や百合の花の背後に、慈しみ深い神の導きの御手が存在するという真実が見えてくるのです。

以上のことを今私たちが直面している状況に当てはめてみましょう。

現在日本はかつて経験したことのない大災害に直面しています。大地震と津波と原子炉のメルトダウンが重なった大災害の状況をテレビで見る時、私たちは「何故神が造られた世界でこのようなことが起こるのだろうか」と問わざるを得ません。

しかし、ああそうか、成る程、それなら分かったという理性を満足させる明快な答えは誰にも与えられていません。

もし、私たちが見えるものにだけ目を注ぐなら、それで終わりです。歴史は単なる過去の繰り返しになります。地震や津波は前にもあった。これからも起こるに違いない。だから人間は自分や家族を守るためにただ我慢し、耐え忍んでいくしかない、という無常観が残るのみです。

しかし、信仰の眼(イエスの目)で状況を見たらどうでしょうか。何故このようなことが、は分からなくても、この未曾有の災害といかに取り組んだらいいのかという、「いかに」という問いには、神は明快に答えておられます。勇気を出すこと。助け合うこと、自分のためだけでなく、家族だけのためだけでなく、見ず知らずの他者と分ち合うこと、他者のために祈ること、これです。

最近のニューヨークタイムズの記事に以下のようなものがありました。大災害に見舞われる以前の日本の大学生のほとんどは、大会社への就職ということに専念していました。しかしあの惨事勃発以後、エリート志向だった学生達の間にもこれまでなかった動きが見えているのだそうです。

それは自分のためだけに生きるという自己中心主義から、他者に優しさの眼差しを向けるという横の連帯の強調、助け合うことの大切さへの覚醒だとその記者は書いています。

この新しい状況は肉眼で見えます。しかし肉眼では見えないもの、信仰の眼でしか見えないものがそこにあることを私たちキリスト者は知っています。苦しむ者と苦しみを分かち合う神の恩寵がその背後に存在することを私たちはしっかりと見極めることができるのです。

私たちに肉眼だけでなく、信仰の眼(まなこ)が与えられているのです。いかなることがあろうと、地獄の底にいようと、神の導きの手をしっかりと見極めることのできる眼(まなこ)が与えられているのです。

いかなる絶望も孤独も、死さえも、私たちを神の愛から引き離すことはできないのです。神の導きの手は、いかなる時も消え失せることはないのです。

ですから、「見えないものに目を注いで」生きていこうではありませんか。